

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol.10 オイスター まい・らぶ

ワインなど飲めないガキだったころ、南仏の市場やレストランの写真をいっぱい載せた料理本の「牡蠣」に恋をした。牡蠣には幾つもの種類があり、フランスの牡蠣は丸くて、白ワインのシャブリがよく似合うと書いてある。素敵♥大人の世界。「いつか生牡蠣をシャブリとともに味わうぞ!!」。きっとそう思っていたに違いない。

刷り込みってやつだろうか。いつしか生牡蠣も、カキ鍋も、カキフライも、筆者の好物となっていた。

それはある日の出来事。長く、忙しく、寒い一日の終わり。その日は（なんだか）パスポートと、大金（現ナマ）を所持していた。既に 21 時を回っていたが、「今夜はカキ鍋さっ!」との固い決意はどんなに疲れていても揺るがない。白菜、シイタケ、ネギ、エノキ、豆腐等々、大量の食材とビール、そして大好きな牡蠣を買い、バスに乗った。

あの柔らかな舌触り、海の香りが口の中いっぱいに広がる。ああ、想像しただけでうっとり。食材一杯のエコバッグをしっかりと抱え、マンションのエントランスまで来て。。。鍵がない!!

バスは空いていた。荷物は重かった。エコバッグを膝に抱え、ひたすら鍋を夢想して……そして、横に置いたビジネスバッグは……そのままバスに置いてきてしまった!

警察署までの 500 メートルをハイヒールで全力疾走。息を切らして、「すっ、すっ、すっ、すみませんっ」と駆け込むと、「な、何がありました?」とお巡りさんが 2 人。

「バスにバッグを置いてきちゃいました。パスポートも大金も免許証も名刺も、全部ゼーんぶ入ってます。でも、白菜と牡蠣とビールは抱えてます（もう、真剣に恥ずかしいぞっ）」

お巡りさん、すぐにバス会社に電話をしてくれ、バッグの無事を確認。安全大国ニッポン万歳!

「バッグは営業所に保管されてますから、取りに行ってくださいね」「はい。。。で、でも私、一銭も持ってません。。。」

お巡りさん 2 人、無言で互いに顔を見合わせる。

「あ〜、幾ら必要ですかあ?」本当はタクシーに乗りたい。が、そこは遠慮がちに、「バスで行くなら営業所まで往復 420 円です」。お巡りさん、なんと身銭は切ってくれ

ない。ものすごく時間をかけて、ボロっとした B5 のノートと、子どもの貯金箱みたいな缶を探してきて、きっかり「420 円」を貸してくれた。そりゃ、私の身分を証明するものは何もありせんわさ。全部バッグの中だもん。でもさ、1000 円ぐらい貸してくれてもよくない?

既に 22 時近く。営業所行きのバスは本数も少なく、寒空の下、ただバスを待つ。牡蠣を抱えて。

で、バッグを取り戻し、警察署に戻り、420 円返しましたとも!

幸か不幸か、牡蠣にあたったことはない。「泡吹いてもう、自分がどうなっちゃうのか、と思った」とは生牡蠣にあたっちゃった友人の弁。筆者もプロ(?)である。基本、出張では生牡蠣には、絶対、手を出さない。と、一応、豪語していた。

「そ、そうか。出張で牡蠣はダメなんだ。食べたらエミさんに叱られる」と思ったらしき、マジメな同僚。一緒の出張で我慢してたらしい。「ええっ! エミさん、あの時、牡蠣を食べてたんですか?」

ごめんね〜、それって一人出張のときの法則なんだよ。私が倒れても、あなたがいれば大丈夫でしょ?

まだまだ、「牡蠣の甘〜い誘惑」には要注意の筆者である。



※ 撮影協力: デリリウムカフェトキヨー (霞が関)